

「どうせ」を「やりたい」に変えるために

首席 吉田航太

10月25日の金曜日、二度の延期を乗り越えて、無事体育祭を行うことができました。学校行事の見直しについて議論されるようになって久しいですが、やはり学校現場で子どもたちの表情を見ている身としては、この笑顔を守ることを前提に、より良いあり方を模索していきたいと思います。

さて、その体育祭が行われた25日の午後、第54回大阪府人権教育研究豊能大会の全体会が豊中市の文化芸術センターで開催され、そこで『どうせ』とつづやく子ども』について考える機会がありました。「どうせ俺にはできへんし」「どうせやっても無駄やし」、一見後ろ向きに聞こえるこの「どうせ」ですが、裏を返せば、「本当はできるようになりたい」「これをやることで力をつけたい」という前向きな気持ちが隠れているのではないのでしょうか。ただ、うまくいかなかった経験が重なり、自信を失い、「どうせ」という言葉になっているのだと思います。

「どうせ」と子どもに言わせないために大切なのが、「成功体験をさせること」です。「失敗から学ぶこともある」「挫折を経験しないと強くなれない」という考え自体は間違っていないかもしれませんが、それはその失敗や挫折の先にある成功体験まで辿り着いて初めて前向きなエネルギーに変わります。私は通級指導という立場なので、勉強や人間関係など学校生活に何かしらの困り感を持っている子どもと多く関わりますが、「どうせ」からスタートする子どもは少なくありません。しかし、通級指導教室で自分に合った課題に取り組み「できた」体験を重ねていくことで、「どうせ」が「できるかも」に変わり、やがて自信をつけて「やりたい」と前向きになっていく子どもたちを見てきました。

先述した体育祭や先週末に行われたATF(オータムつながりフェスティバル)などの学校行事は特に成功体験を得やすいですが、日々の学校生活や家庭生活の中にも成功体験につながるチャンスは隠れています。それをなるべく見逃さず、子どもの成功体験とその先にある自信につなげていけるよう、これからも子どもたちと関わっていきたいと思います。そして一人でも多くの大人が、この視点を持って子どもたちと関わってくだされば、大変心強く思います。